



七高僧シリーズ その3

### 第三祖 曇鸞大師(どんらんだいし)

476年～542年(日本に仏教が伝わった時代)

著作:『往生論註』(『論註』と略称する)

特色:自力・他力を明らかにして、他力の道をすすめた。(自力他力)

略伝

曇鸞は、中国の北部、五台山(当時の仏教研究の中心地)に近い雁門に生まれ、15才で出家しました。曇鸞はこの山で仏道の修行に励み、『中論』『大智度論』など、龍樹の著したもの学びます。

曇鸞は、「大集經」(六十巻ほどある大部の經典)の注釈を思い立ちますが、事業のなかばで病気になってしましました。その時、「このようなことでは困る。仏法を学び尽くすためには長寿でなければおぼつかない。何とかして長生不死の法を身につけよう」と考え、仏教の勉強を中断して道教(呪術)を学びはじめました。

50才の頃、南方の梁の国まではるばる旅をした曇鸞は、梁の武帝の敬いを受け、首尾よく道教の第一人者といわれていた陶弘景(とうこうけい)に会い、念願の仙術奥義の書の伝授を受けました。「これで長生きして仏教研究が続けられる」と喜び勇んで帰国の途についた曇鸞は、途中、洛陽の都に立ち寄りました。

その頃、洛陽に菩提流支三藏がおられました。菩提流支は、北インドからシルクロードを経て北魏に来て、持ってきた多くの經典の中国語訳につとめていた僧です。

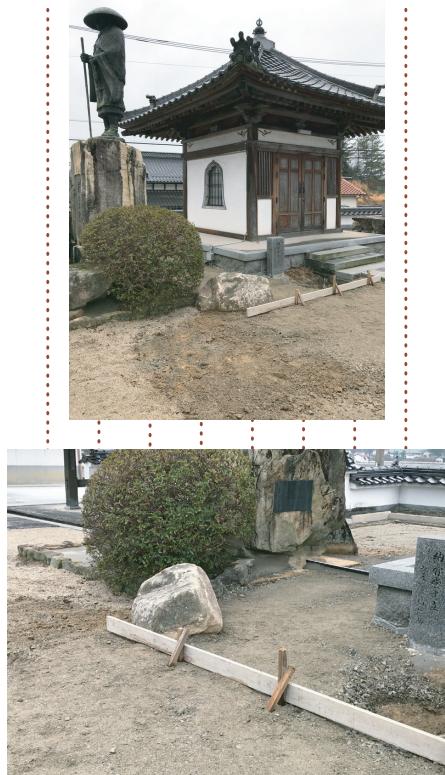
曇鸞が菩提流支に得意気に仙術の書を見せると、菩提流支は大地にパッと唾を吐き捨てて、「少々長生きして何になる。すみやかに生死解脱の真の長生不死の法を求める。限りない生命を得る真の不死の書はこれだ」と言って『観無量寿經』を示されました。曇鸞は悔悟し、仙経を焼き捨てて浄土の教えに帰し、念佛三昧の生活に入りました。

彼の徳の高さは四方に伝わり、武帝は北に向かって「鸞菩薩」と拝し、魏王は「神鸞」と敬まったくといわれています。

親鸞聖人は「正信偈」に「本師彌縛は、梁の天子、つねに鸞のところに向かひて菩薩と礼したてまつる」と書いておられます。

親鸞聖人は「権力者にたよって仏法を弘めることはあってはならない」と言われたのに、なぜこのような表現をされているのでしょうか。世の中で一番頭を下げないのは権力者でしょう。そして、人の話を聞こうとしないのも権力者です。自分の言葉を押しつけることはあっても、他人の話し、それも仏法の話に耳を傾けることは難しいことであったに違いありません。いわんや他人に頭を下げさせても「菩薩と礼したてまつる」と、他人に頭を下すことなどは考えられないことです。その考えられない難しいことを梁の武帝はしたのです。

雲鸞の素晴らしさを見聞するとき、天子も頭を下げるにはおられなかつたのです。



皆さまのご参拝、お待ちしておりますね。

昨年の秋頃より、境内地の整備に取り掛かっております。第一弾として、墓苑参道の整備。続いて第二弾は境内洗面所付近、今は第三弾に入り、納骨堂周辺を整備しております。これで終わりではなく、まだまだ続きます。境内地の整備が終わりましたら、次は本堂北側の山の整備です。この山を、『瞑想の森』のようにしたい、お祈りさまが悟りを開かれた菩提樹の森のようになればと思うのですが、果たして私が生きている間に完成するでしょうか。住職を継職して二十五年、振り返ると、どこかを整備したり工事したり修理したり、そんな事ばかりしている感があります。伽藍の維持整備管理が、その代の住職の重要な務めだと、改めて実感しております。

さて、三月に入りますと、仏教婦人会の報恩講並びに総会が開催されます。新型コロナウイルスで世の中は騒がしいですが、適切な予防措置を取り、予定通り法要を勤めたいと思っております。

住職レター

発行日：2020年2月25日（毎月25日発行）発行所：浄土真宗本願寺派

善教寺

〒739-0036 東広島市西条田口500-4  
TEL(082)425-1357 FAX(082)425-1248